

「傾聴と共感 想像力→取材者にも欠かせない姿勢と再認識」

NHK 飯野奈津子

「脳コワさん」支援ガイド、拝読しました。生活する上で様々な困難を抱えている脳コワさんたちの状況がとてもよく理解できました。鈴木さん自身の障害の解釈が客観的で確、例示がわかりやすく、分析力の鋭さと表現力の豊かさに関心させられました。“唐揚げの肉と衣”や“とんでもなく乗りにくい自転車に乗っている”例えなど、ずっと状況を理解させるテクニクは、流石だなあと感じました。鈴木さんが状況を可視化してくださったことで、私自身取材する中でも、どうしてなんだろう、何が起きているんだろうと感じていたもやもやが、晴れたような気がします。まずお礼申し上げます。

その中で、鈴木さんが全援助職に求めている「傾聴と共感、そして想像力」は、私たち取材する立場の人間にも欠かせない姿勢だと再認識しました。講義の中で、社会的困窮者・貧困ジャーナリズムの分野で、やってはならない当事者取材が横行しているのではないかと、問題提起されました。見たまま、当事者の声をそのまま映像化することの危険性、フラッシュバックのリスク、取材後のケアまでやりきる自信はあるのか、一期一会の取材は存在しない・・と。

私は40年近くテレビ報道の現場で仕事をしてきました。レイプ被害者やDV被害者、生活困窮者や認知症の人など、配慮が必要な方々を取材する中で、当事者の思いの一部分を切り取って映像化することの難しさを痛感しています。若い時には無我夢中でやっていましたが、年齢を重ねるごとにその難しさを身に染みて感じるようになり、一本の番組を制作するのに、心身ともに疲弊してしまいます。それでもきっと、わかった気になって報道していることが、当事者の思いとずれていることもあるのかもしれない。改めて、謙虚に当事者の思いに耳を傾け、映像化することのご本人へと影響や社会の受けとめにも配慮しながら、真剣に慎重に取り組まなければならないと、思いを新たにしました。

鈴木さんが脳コワさんたちの思いをわかりやすく伝えてくださることで、その人の状況に沿った支援が進むものと期待しています。今後ますますのご活躍をお祈りします。大変貴重はお話をありがとうございました。